

---

## 終章

---

### 自己点検・評価のまとめ・今後の展望

龍谷大学は2009年に創立370周年を迎えたが、本学は、その中でも龍谷大学文学部に次いで長い歴史と伝統を持っている。60有余年の長きに亘り多数の優秀な人材を社会に送り出してきたことは、短期大学として社会的に大きな役割を果たしてきたと言える。創立当初からの変遷を振り返れば、絶えず社会の変化や時代の要請を受けとめて教学・研究・社会活動に取り入れ、さまざまな改革をしてきたことは、まさしく「進取と伝統」に値すると言える。「進取と伝統」とは、龍谷大学創立370周年記念行事において使用した象徴的な言葉である。単に昔を懐かしむとか、古いものが良いということではなく、伝統を重んじながらも、その時々社会が求めるものに応えて、その時代の新しさを反映させた手法を取り入れてきたからこそ、本学は現代まで存続してきたという趣旨である。まさしく新しさを積み重ねてきたから、この現代社会に存在しているのだということを表現した言葉である。そのような歴史を積み重ねる間、建学の精神に生かされた有為の人材を社会に送り出すという使命を果たしてきた。

2011年4月に、本学はさらなる社会的要請に応えるため、「社会福祉学科」と「こども教育学科」の2学科体制に再編した。

このたびの自己点検・評価活動において、本学を構成する教職員が、常態化した業務から視野を転じて教育・研究・社会活動を見直す契機となったことは、大きな意義があった。加えて、学科改組という重要な経験を踏まえ、学部・学科全体の今後の改善策につき共通認識を獲得できたことは千載一遇の機会となった。

二十一世紀の現代、短期大学は、多くの課題を抱えつつ、非常に厳しい局面にある。かつて二十世紀終盤には、効率的で凝縮されたカリキュラムを展開していた短期大学に、多くの志願者があった。しかしながら人々の生活が一定水準に達した頃から、短期大学より4年制大学を志願する者が増加した。わずか十数年のうちに、社会における教育や大学に対する価値観の変化がみられる。そのような一般的傾向ではあるが、短期大学を志願する者も一定程度みられるため、本学がそのような志願者に応えていくことは、まさしく建学の精神に相通じるところである。

これまでの自己点検・評価活動を通じて認識できた課題は、次のような事柄である。大学基準協会への認証評価の受審を契機に発足した短大自己点検・評価委員会であったが、その点検・評価活動が、本格的に十分な機能を果たしたとは言い切れない。現在、この自己点検・評価活動を毎年実施しつつ、そのことから生まれる成果をより実質的かつ有意義なものとする必要がある。また、自己点検・評価活動を通して、本学教職員のFD活動への認識をも深化させ、その実践を蓄積することでFD活動についても充実していくべきである。

また今後は、より優秀な学生の確保だけでなく、入学した学生が有している多様な能力を引き出し、その能力に自信を持たせることが求められる。18歳人口の減少、大学全入時代を経て大学卒業生の割合がますます増加していく社会にあって、自信を持って学生を送り出すことが、本学教職員に託された使命である。

その達成目標を見据えて、自己点検・評価活動を自主・自律的に行うことが常態化しつつ、恒常的に検証・改善をしていくべきであると認識を新たに行っている。